

『昔風と當世風』第九十六号抜刷  
平成二十四年四月一日 古々路の会

# 間取り図では読み取れない住居空間の感覚

森  
隆  
男

# 間取り図では読み取れない住居空間の感覚

森 隆 男

愛知県田原市堀切町でみられる住まいは整形四間取りで、西日本に一般的にみられる農家の形式である。ところが各部屋の使用形態や儀礼の際に顕在化する動線が、間取り図に示されることはない。本稿ではカミーンモとオモテウラという住まいの秩序を創出する二つの軸に留意しながら、この地域で展開されてきた日常の暮らしと儀礼を検証し、伝承されてきた住居空間の感覚をさぐる。

## 一 整形四間取りの住まいで展開される広間型の生活

図1は昭和三〇年頃の小久保将啓家の間取りである。右側に小便所をみながら玄關の敷居をまたぐと、右手に風呂が据えられていた。風呂の水は、庭の井戸からバケツで運んだという。使用後の風呂の湯と小便を下肥に利用する、かつての農家に見られた配置である。土間のウラ側は台所で、ナガシと箆が設けられていた。

この地域の住まいの特色は次の間に当たる

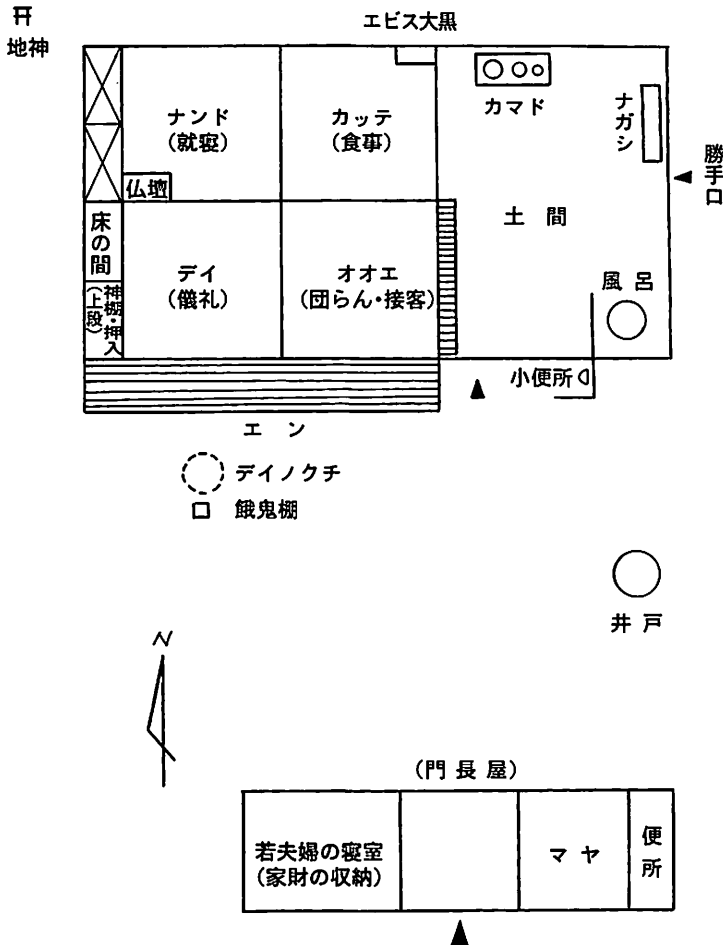


図1 小久保将啓家 間取り図

オオエが家族の団欒を過ごす部屋になっている点で、現在テレビもこの部屋に置かれている。客との対応もこの部屋で行なわれ、「瀬古」と呼ばれる地域の寄合は持ちまわりで会場が提供されるが、当番に当たるとこの部屋で行なわれる。人数が多い場合はデイも使用

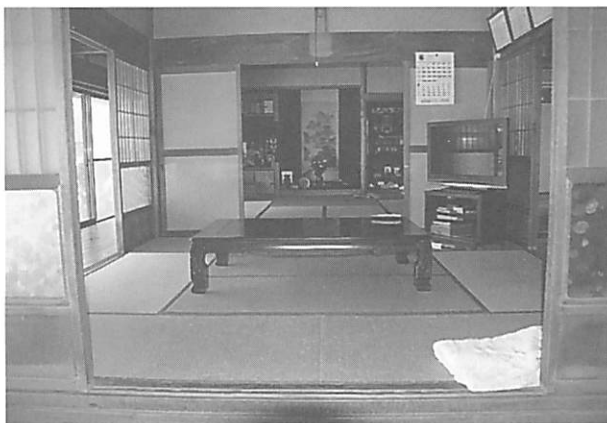


写真1 土間からオオエ（手前）とデイを望む

する。

オモテとカミの要素が重なるデイは年中行事や婚礼、葬儀などの儀礼にのみ使用される。まれに客の寝室にもなる。ナンドは家長夫婦の寝室で、かつては産室に当てられた。ナンドのシモ側はカッテと呼ばれた板敷きの部屋で、家族の食事の場である。

長屋門をもつ住まいが多く、「門長屋」と呼ばれている。門より長屋の機能が重要視さ

れているためであろう。門長屋は箆笥などの家財を収納する場であり、屋内の仕事場にもなる。また若夫婦の寝室にもなった。ちなみに子供が結婚すると親の寝室はナンドに移り、祖父母はナンドから別棟の隠居部屋に移動する。また門長屋には出入り口の右に便所と牛を飼うマヤが設けられていた。

この住まいで祀られる神仏についてもふれておきたい。デイには仏壇と神棚が設置されている。神棚には伊勢神宮のほか、氏神の伊良湖神社、津島神社の神札が祀られている。カッテにはエビス・大黒の縁起棚が設置されている。エビス神は毎年一月二〇日ごろ「金儲け」に出掛け、一月二〇日ごろ帰ってくるので、この日は尾頭付の魚を供える。また竈付近には秋葉神社の神札が貼られている。さらに井戸には水神の存在が意識されており、正月に注連縄が張られる。門長屋の出入り口の上には門神の祠が取り付けられ、節分にはヒイラギの枝と鯛の頭が挿し込まれる。多様な社寺の神札を貼っている事例もみられた。主屋の北西側には屋敷神として地神が祀られている。

各部屋を使用目的からみたとき、デイは住まいの中で儀礼と祭祀の空間に特化しているといってもいいだろう。デイはナンドや次の間のオオエとは明らかに異質の部屋であると



写真2 デイの神棚

いえる。逆にオオエはデイと接しながら家族の団欒など日常生活の中心にあり、必要に応じて接客の場にもなる部屋である。デイとオオエの間は建具の襖で区切られているが、精神的な結界が存在し、両者の間にカミーンモの序列が明確に意識されている。浄土真宗の住まいの中には、デイのさらにカミ側に二畳程度の広さの小部屋をつくり、仏間にしている事例があるという。この仏間もカミーン

その序列に並ぶ最上位の部屋とみることができ  
る。

以上のように、基本的にはカミーンシモとオ  
モテウラの秩序のもとに日常生活が営まれ  
ているが、オオエは複合的な機能をもつ中心  
的な部屋になっている。オオエが家族の団樂  
の場と接客の場を兼ねる部屋とされたのは、  
この部屋がカミーンシモの序列の中であいま  
い位置にあり、柔軟な利用を可能にしたと考  
えていいだろう。機能面からみたとき、オオ  
エは広間型住まいのヒロマに近いといえよう。

## 二 デイノクチが創出する住感覚

日常はほとんど使用することがないデイで  
あるが、儀礼の際にはデイノクチというみえ  
ない出入り口が顕在化する。デイノクチはデ  
イに面した前庭の雨だれ付近、厳密には雨だ  
れのすぐ外側に設けられる。当地の住感覚を  
理解する上で重要なポイントはこのデイノク  
チである。

八月一三日の朝、墓地から迎えてきた祖先  
の霊をデイノクチで松葉を燃やして迎え火と  
し、デイに安置している仏壇に迎え入れる。  
祖先の霊についてくる餓鬼仏のために、デイ  
ノクチよりさらに外側に餓鬼棚を作る。三〇  
センチ四方に四本の竹を挿して脚とし棚を取  
り付けたもので、棚の上にミノハギを入れた

茶碗を置く。一五日の夕方には迎え火と同じ  
デイノクチで送り火を焚く。その火で一本の  
線香に火をつけ、先祖の霊を供物や撤去した  
餓鬼棚とともに墓地まで送っていく。

婚礼の当日、娘が実家を出る際は、デイか  
ら縁を通って直接庭にでる。さらにデイノク  
チを経て婚家に向かった。葬儀の際の出棺の  
動線も同様で、デイから縁を経てデイノクチ  
で死者が生前使用していた茶碗を割ったあと  
墓地に向かった。

オモテ側に面して安置されていた仏壇は、  
餓鬼棚の位置とデイノクチ、さらにデイを結  
ぶ軸上にある。迎え火と送り火を焚く場もこ  
の軸上で行なわれることになる。葬儀の際の  
出棺と婚礼の際の出立においても、デイノク  
チがこの住まいに戻ることはない者の象徴的  
な出口となった。観念上のデイノクチが重要  
な儀礼の場になっていることがわかる。

デイノクチが雨垂れ落ち付近に設けられて  
いることは、雨垂れ落ちがすまいの内と外の  
結果であることを示している。雨垂れ落ちに  
結果を設定する民俗事例は多い。別稿で紹介  
したように、徳島県三好市東祖谷山では葬儀  
の当日、雨垂れ落ちにヒイラギやアザミなど  
棘のある植物を置き、死者の霊が帰ってきて  
も住まいに入れないためであると説明してい  
る。津山正幹も雨だれ落ちで行なわれる誕生

や死に関わる民俗儀礼に着目して、その場が  
住まいの内外を分ける神聖な境界であり、そ  
こから生死を司る力を得ていたとする興味深  
い結論を導き出している。

非日常時にデイノクチの存在が浮上する背  
景には、庭が外の世界であることを示してい  
る。このことは門長屋が造られていることと  
齟齬をきたすといってもよからう。門長屋に  
は前出のように門神の祠や魔よけの装置が取  
り付けられ、庭は住まいの内側と意識されて  
いるからである。門長屋の新設という住まい  
の変容の中で、デイノクチに関わる古い感覚  
が残されてきた歴史をうかがうことができる。  
暮らした場である住まいには、新旧の感覚が  
混在していることも珍しくない。

## 三 変容していく住まいと残存する古い 住感覚

近代以後、この地域では本来なかった門長  
屋を新築する家が増加し、門長屋が住まいの  
内外の結果と意識されるようになった。すな  
わち庭が住居空間の中に取り込まれ、結果が  
移動したのである。小久保家の玄関には狸の  
置物が置いてあり魔よけのためと説明される  
が、これはかつての玄関が結果であったとき  
の名残といえる。

図2は、昭和一〇年に松下石人が著した

『三州奥郡風俗図絵』に、「中流の家」と題して収録されている住まいの間取り図である。本書は明治二六年生まれの松下石人が古老から聞き書きをして著したもので、明治から昭和初期の渥美半島の住まいと暮らしを知る上で貴重な資料である。この図と図1を比較するとウラ側の部屋の規模は異なるが、ほとんど同じである。オオエに当たる部屋は「台所」と呼ばれ、上り框近くにいろいろが切られていることから接客の場としても使用された

図2 明治時代の間取り（『三州奥郡風俗図絵』角川書店）

のであろう。また勝手の広さは三畳程度で、食事の場であっても居間としては狭いので、家族の団欒は台所が当てられたと思われる。デイの仏壇と神棚の位置も基本的には同じである。とくに仏壇がナンドを背にしてデイの中ほどに安置されている点に注目したい。これはオモテ側の三尺幅の開口部から仏壇を拜するためであろう。土間に幅四尺の大戸と、デイに幅三尺の建具がある程度で、全体的に閉鎖的な構造であった。

敷地の見取り図も描かれており、門口を入ると右手に灰部屋と便所、井戸が設けられ、門長屋はない。興味深いのは、七月一三日の「棚経」の説明に「この日檀那寺より各戸に棚経とて座敷口に作りある竹棚へ短き読経をなして廻り来る」とあることで、「竹棚」に読経する僧侶の図も添えられている。「座敷口」はデイノクチであり、「竹棚」は餓鬼棚である。この図が小久保家での聞き書きから得られた住まいと暮らしの情報とほとんど一致することから、当家がこの地域方における近代の住まいの典型とみていいだろう。

さて昭和三〇年頃から、住まいと暮らしに変容がみられるようになる。とくに昭和三四年九月二六日に来襲した伊勢湾台風は、この地域に大きな被害をもたらし、多くの住まいが損壊した。復興期の新築・改築に当たって

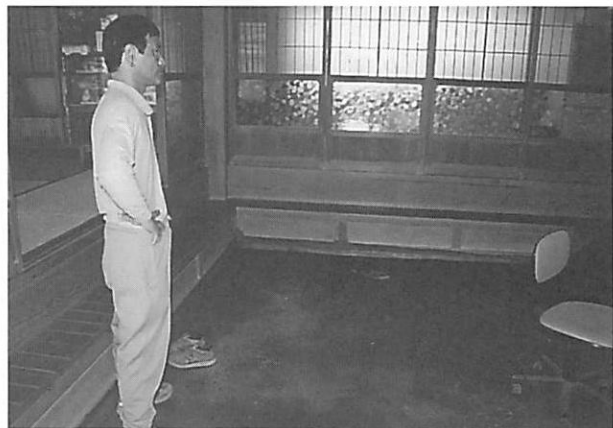


写真3 土間とカッテバ（右奥）

大幅な改造が加えられた。

カッテバが土間にせり出す形で造られてカッテバと呼ばれるようになり、それまでのカッテバが家財道具を収納する部屋になった。この部屋のオオエ側に半間幅の廊下が新設され、ナンドへの通路になった。カッテバは板敷きであり、関西地方のヒロシキと同様、土足のまま食事が取れるように土間にせり出した設備であろう。現在カッテバの玄関側にはハメ

コロシの戸が使用され、土間に入ってきた客の視線を遮っている。また上水道が整備されたことにより、土間のオモテ側にあった風呂が土間の奥に移動した。便所は門長屋のマヤに接してつくられていたが、一九七〇年頃から母屋の中に設けるようになった。玄関脇の小便所も撤去された。同じ頃、風呂をすえていた土間の一角に応接間を新設する家が増え、接客機能の一部がそちらに移った。このように玄関から土間にかけて大きく変容したが、接客を含む生活の中心の場がオオエにある点は変わらなかった。

なお、かつてデいでオモテ側に面して安置されていた仏壇が土間側に向けて安置された。これは仏壇の位置がデイノクチとデイを結ぶオモテウラの軸が創る秩序から、カミーンシモの軸が創る秩序に移行したことになる。この点は重要であり、日常と非日常を問わず玄関に出入り口が集約されていく過程で生じた変容といえる。現在デいの前面の庭には植栽が施され、今後デイノクチの存在は急速に忘れられてゆくのではなからうか。

間取り図によって住まいを分類する方法は客観的で、有効な研究方法であることは確かである。しかし生活の場としての住まいをより深く理解しようとするとき、この方法だけでは限界がある。本稿で取り上げた事例では、

オオエのもつ柔軟な機能と、儀礼の際庭に設定される厳格な結界が、この住まいで展開される日常の生活と非日常時の儀礼を支える重要な要素になっている。これは間取り図からは読み取れない住居空間の感覚といってもいいだろう。

本稿を書くに当たって、当地域の住まいについて多くの情報を提示して下さった山本邦彦氏と、自宅の調査を認めていただいた小久保将啓氏に心よりお礼を申し上げる。

(参考文献)

森隆男「住まいの結界―徳島県三好市東祖谷山の葬送儀礼から」『評陵』第五〇号 関西大学博物館 一九〇五

津山正幹「民家と日本人」九二―九九頁 慶友社

二〇〇八

松下石人『三州奥郡風俗図絵』日本民俗誌大系第

五巻 中部一 角川書店 一九七四